

キリシタンと和時計関連史料

平岡隆二

(京都大学人文科学研究所)

西洋式機械時計製作の日本への最初の技術移転は、イエズス会布教を通じて行われたものであり、さらにその技術が後の和時計製作へと受け継がれていたことは、時計史の専門家の間ではすでによく知られている¹。しかしその技術が、キリシタン禁教後にどのように継承され、そしてその後の和時計の成立にどの程度の寄与を果たしたのかという問題については、なお研究の余地が多く残されていると思われる。

編者は既発表の論文²においてこの問題を取りあげ、管見に入った史料をもとにキリシタンと和時計との結びつきについて論じたが、とくにイエズス会文書をはじめとする欧語史料や、17世紀の和時計にまつわる文化史・社会史的史料については、さらなる調査収集と評価を推し進める必要があると考えている。本史料紹介は、前稿では紹介できなかったものや、その後新たに見出した史料のいくつかを編纂・紹介することで、この分野の研究の一助とするとともに、将来の前稿改訂に備えることを企図したものである。

以下に列挙する史料は内容・分野とも多岐にわたり、個々の位置づけにまつわる検討はいずれも将来の課題とせざるを得ない。ただし、現時点でとくに重要と思われるものを挙げると、たとえば「コウロス徴収文書」(史料7)の山城国・郡部に、「時計」姓のキリシタンが複数見えることは、前稿で論じた、京都における黎明期の時計製作とキリシタンとの密接な関係を裏付けるものとして重要である³。また17世紀上方の俳諧師が時計を詠んだ句を多く残しており、中には「南蛮」の異国イメージと結び付けた句(史料10)が含まれることも注目に値しよう。この種の史料は、客観的な歴史事実を伝えるものとは言えないが、当時の人々が時計に対して持っていたイメージやその文化的コードをさぐるうえで重要な手がかりと言えるからである。

将来の史料博搜によりこの種の史料はなお多く見出し得ると思うが、これをひとまずの中間報告として、大方のご批正とご教示を頂ければ幸いである。

¹ たとえば、山口隆二『日本の時計：徳川時代の和時計の一研究(改訂第二版)』日本評論社、1950年、16頁。佐々木勝浩・近藤勝之「平山武蔵作天文表示一挺天符櫓時計」『国立科学博物館研究報告 E 類(理工学)』第38巻、2015年、9-12頁参照。

² 平岡隆二・クリストファーカレン「ジュネーブ天儀：17世紀日本の天文模型」、『洋学：洋学史学会研究年報』第26号、2019年5月、49-78頁(英語版：Christopher Cullen and HIRAOKA Ryuji, “The Geneva Sphere: An Astronomical Model from 17th Century Japan”, *Technology and Culture* 60-1, 2019, pp. 219-251. DOI: 10.1353/tech.2019.0007)。HIRAOKA Ryuji, “Jesuits and Western Clock in Japan’s ‘Christian Century’ (1549-c.1650)”, *Journal of Jesuit Studies* 7-2, 2020, pp. 204-220. DOI: 10.1163/22141332-00702004.

³ 前掲 Hiraoka (2020), pp. 214-215, 217-128 参照。本史料の存在をご教示頂いた阿久根晋氏に感謝申し上げます。

凡例

- ・史料はすべて時系列に配列した上で、[通し番号] (分類：) 著者名等『資料名』その他書誌的事項。年代、の順に記し、原文は二字下げで引用した。
- ・内容や文脈から機械時計と判断されるものを中心に収録したが、他の時計（水時計、砂時計、日時計など）と区別できなくとも収録したことがある。また年代の下限は 1710 年代を一応の区切りとした。
- ・引用は原文に忠実を旨としたが、漢字は通行の字体に、変体仮名は通常の仮名にそれぞれあらためた。
- ・「Toqei」「とけい」など注目すべき語句に付した下線は、いずれも編者によるものである。
- ・日付はすべて旧暦である。

[1] 日本イエズス会編『羅葡日辞書 *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*』。文禄 4 年 (1595) 刊

Horologium, ij. [時計] [P] Lus. Relogio. [J] Iap. Toqei, rōcocu. [トケイ、ロウコク]

Horariū, ij. [時計] [P] Lus. Relogio, ou outro instrumêto q̃ mostra as horas do dia [時計、あるいは昼の時間を示す他の器具] . [J] Iap. Toqei, rōcocu⁴.

[2] 日本イエズス会編『日葡辞書 *Vocabulario da lingua de Iapam*』。慶長 8-9 年 (1603-1604) 刊

[J] Toqei. [トケイ] [P] Relogio. [時計] [J] ¶ Sunano toqei. [P] Relogio darea [砂時計] . [J] Toqifacari [トキハカリ] . [P] Relogio.

[J] Toqimori. [トキモリ] [P] O que tem cuidado das horas, ou relógio. [時刻や時計を管理する人]

[J] Vomori. [オモリ] [P] Peso como de relógio, balança, &c. [時計や天秤などの錘]

[J] Vomoxi. l, vomori. [オモシ、またはオモリ] [P] Peso como de balança, ou relógio [天秤や時計などの錘]⁵.

[J] Rōcocu. i, Toqei. [ロウコク、トケイに同じ] [P] Relógio como darea, agoa, &c [砂や水などの時計] .

[3] 日記：義演准后（京都・醍醐寺）「義演准后日記」。慶長 16 年 (1611)

トケイ 今日出来（十一月十四日条）

⁴ 岸本恵美解説、三橋健書誌解題『フランス学士院本 羅葡日対訳辞書』（影印本）清文堂出版、2017 年。

⁵ 土井忠生解題『日葡辞書』（影印版）岩波書店、1960 年。また土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店、1984 年も参照した。

トケイ、時ヲハカル、凡無異、アヤツリ奇妙也（十一月十八日条）⁶

[4] 日記：金地院崇伝『異国日記』。慶長 17 年（1612）6 月 20 日条

方物到来之目録

一、斗景 壺⁷

備考：スペイン国王フェリペ 3 世から徳川家康に贈られた「洋時計」（久能山東照宮博物館蔵）を指す。

[5] 紀行文：三条西実条『東国名所在名ニ付雑々覚』。慶長 19 年（1614）

とけいの数廿四うちけるをきゝて
よるとひる二日の時の数うつは
しかけあしきかわるきとけいか⁸

備考：当時武家伝奏の実条は、慶長 19 年 2 月 28 日に京を出て駿府に到着し、3 月 8 日家康に対面、4 月 12 日江戸に下り、20 日また駿府に至って月末帰京した⁹。

[6] 黒田長政書状（覚）、小河内蔵允宛。2 月 25 日付（年不詳。元和元年〔1615〕以前か）

覚

一、はかた帯其外之織物申付置候事無用之由、安右衛門へ可申聞事。

[中略]

一、先度申遣とけいしかけ候者、安右衛門ニ申抱させ候て爰元可下事。

[中略]

二月廿五日 長政 御印判
小川内蔵允殿

二月廿五日御目付ノ御覚書、元和元年大坂落城前御覚書と見候¹⁰。

⁶ 京都市編、林屋辰三郎責任編集『京都の歴史 4 桃山の開花』學藝書林、1969 年、472 頁所引。

⁷ 辻善之助校訂「史料：異国日記（五）」『史苑』第 1 巻第 6 号、1929 年、33-36 頁、とくに 34 頁。

⁸ 早稲田大学図書館蔵本（三条西実条自筆本。請求記号：へ 02 04867 0023）、3 丁表。

⁹ 井上宗雄「文禄・慶長期の歌壇―主として堂上歌壇の動向について」『国文学研究』第 44 号、1971 年、34 頁参照。

¹⁰ 「黒田御用記」坤巻、第 7 8 文書。九州史料刊行会編『黒田御用記 乾坤、長政公御代御書出令條』（九州史料叢書 29）九州史料刊行会、1961 年、147 頁。

[7] 「イエズス会コウロス徴収文書」第四文書 山城国・郡。元和3年（1617）

Toqei Sōtei Thome 時計 宗貞とめい（花押）
[中略]
Toqei Xōyemon Miguel 時計 勝右衛門ミける（花押）
Vonajiqu Suqegorō Mathias 同 助五郎まちやす（花押）¹¹

[8] 『徳川実紀』大猷院殿〔徳川家光〕御実紀。寛永3～9年（1626-1632）

土圭坊主 壹人（寛永3年5月、秀忠上洛の供奉者の中に）¹²

時計方二人 [中略] [銀] 三枚づゝ（寛永9年2月26日下賜の秀忠御遺金）¹³

[9] 俳諧：松江重頼編『犬子集』。寛永10年（1633）刊

月と日のめぐるは車とけいかな〈慶友 [=半井ト養]〉（巻五・月）¹⁴

やぶれ車はめぐる共なし
しかけぬるとけいの時は定まらで〈〔斎藤〕徳元〉（巻十四・雑上）¹⁵

備考：「犬子集」は貞門俳諧最初の公刊撰集。松江重頼が当代の句を中心に編集・刊行。

[10] 俳諧：安原貞室著、松永貞徳判『正章千句』第八。慶安元年（1648）刊

小さき車くはらめかすらし
枕上の斗鶏に夢をさまされて
南蛮人の月をみるさま
冷しとせいたかおとこ笠をとり¹⁶

¹¹ 松田毅一『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』風間書房、1967年、1033頁。

¹² 黒板勝美、国史大系編修会編『徳川実紀 第2篇』（新訂増補国史大系 39）吉川弘文館、1964年、368頁。なお『徳川実紀』には、以降の諸巻に「土圭間」「土圭間番」等の記述が多数みられるがいずれも省略に付した。

¹³ 同上、540頁。

¹⁴ 森川昭、加藤定彦、乾裕幸校注『初期俳諧集』（新日本古典文学大系 69）岩波書店、1991年、100頁。

¹⁵ 同上、208頁。

¹⁶ 東京大学附属図書館洒竹文庫蔵本（内題「千句独吟之俳諧」。請求番号：洒竹 1878。DOI：10.20730/100052656）、42丁表。近代活字本は、大野洒竹編纂校訂『芭蕉以前俳諧集』上巻、博文館、1897年、285頁。安原貞室（名、正章）は京都の紙商で貞門七俳人の一人。貞門派では松江重頼と双璧をなしたとされる。

備考：がらめかす（がらがらと音をたてる）車→唐めかす車（＝齒車時計）→枕元で時を打つ時計→月を見る南蛮人→笠（＝帽子？）をとる背高男、というイメージの連鎖

[1 1] 『徳川実紀』大猷院殿御実紀。慶安元年（1648）4月11日

土圭坊主 二人〔中略〕銀三枚づゝ下さる（日光供奉の下賜金）¹⁷

[1 2] 俳諧：西山宗因、「つふりをも」百韻。万治2年（1659）以前秋

当年は五月二つの廻りあひ
とけいてしるや夜のなかみしか¹⁸

[1 3] 『徳川実紀』厳有院殿〔徳川家綱〕御実紀。万治2年（1659）9月

堀田備中守正俊 土圭 一（家綱の本丸遷移時に大名らが献じた調度品の内）¹⁹

[1 4] 俳諧：寺田重徳編『俳諧独吟集』卷下。寛文6年（1666）

夜昼も車とけいにつもり置
かはり\ / にする番所 （「独吟百韻 江崎氏幸和」の内）²⁰

[1 5] 仮名草子：編者未詳『ゑ入ぬれほとけ』。寛文11年（1671）刊記

とけいの糸のからくりも、きれはきれよとつよくでて²¹

かつちりとひょうしいできて時をうつ そふいふものはとけいからくり²²

陽は物いふものといよ\ / とくしんあるへし。とけいも心なし陰のくろかねなれとも、かつちるといふ陽のひやうしのこゑ出て、其事忘すして生物のこつく小半時をうつなり〔中略〕。人間にかきらす生とせいけるもの、天地のとけいのがるゝといふ事なし。とけいそなわれは物いふ事おのつからそなわるなり。爰をもつてとけいからくりと申

¹⁷ 黒板勝美、国史大系編修会編『徳川実紀 第3篇』（新訂増補国史大系 40）吉川弘文館、1964年、534頁。

¹⁸ 西山宗因全集編集委員会『西山宗因全集 第3巻俳諧篇』八木書店、158頁。

¹⁹ 黒板勝美、国史大系編修会編『徳川実紀 第4篇』（新訂増補国史大系 41）吉川弘文館、1965年、322頁。

²⁰ 東京大学総合図書館蔵本（請求番号：竹冷 18。DOI：10.20730/100052644）、下巻 11 丁表。

²¹ 『ゑ入ぬれほとけ』（稀書複製会第8期 18）、米山堂、1934年、上巻 1 丁表。

²² 同上、下巻 10 丁表。

候なり²³。

[16] 俳諧：西山宗因、「天満千句」。延宝4年（1676）12月頃

よ入道その味ひをかんかへて〈西鬼〉
斗圭[†]をしかけ出る化け物〈如見〉
朝朗姫路の城の番替り〈武仙〉²⁴

備考：夜入道（よにゅうどう）は、入道姿をした人。また、夜歩きをするあやしげな坊主（日本国語大辞典第2版）。

[17] 地誌：浅井了意『出来斎京土産』巻三、四条河原。延宝5年（1677）

四条川原〔中略〕祇園の西の楼門より西の方をみれば祇園町二町ばかりの西は河原おもてなり。橋ひとつさかひて西にも東にも芝居をかまへて鼠戸をしつらひ、さま／＼見物すべき事あり。狼のいけどり。犬猿の芸〔中略〕。斗鶏^{とけい}のからくり。あるひは魚鳥のめつらしき²⁵。



図1：「四てうかはら」（『出来斎京土産』巻3）²⁶

²³ 同上、下巻13丁裏～14丁表。

²⁴ 西山宗因全集編集委員会『西山宗因全集 第3巻俳諧篇』八木書店、324頁。

²⁵ 横山重監修、松本隆信解説『出来斎京土産』（近古文学資料類従古板地誌編6）勉誠社、1976年、172-173頁。

²⁶ 同上、174頁。

備考：上掲図版に「斗鶏のからくり」は描かれていないが、テキストの背景にまつわる参考画像として掲げた。

[18] 俳諧：池西言水編『東日記』乾・秋。延宝9年（1681）

枕土圭遠寺やうつす秋のくれ〈摂州 梅朝〉²⁷

[19] 地誌：戸田茂睡『紫の一本』巻4、時の鐘。天和元年（1682）奥書

「とけい」と云ふ字、時計と書く人あり。時を計るといふ義理尤なりといへども、「とけい」の名日本にて付けたる名にあらず。唐よりの名なり。時の字「じ」の音にて、「とき」は和読みなり。唐には音ばかりの有りてよみはなし。呉音、漢音、唐音、拗音、直音とていろいろありといへども、時の字を「と」と響く事なく、時の字「とき」と読む故に、下略して「と」と読ませ、計の字は「けい」と読ませて時計と書くは、和俗の作り文字疑ひなし。又度計と書くと云ふ人あり。はかりはかるとの義理にて、宛字といふものなるべし。懇伯翁と云ふ者あり。土圭と書くといへり。漏箭の後、時をはかる器を土にて作りたる事あり。この故に土を書く。圭は十干と十二支を合はせて二十二なれば、圭の字を書くに云へり²⁸。

[20] 浮世草子：井原西鶴『好色一代男』巻五・一。天和2年（1682）刊

私は三すぢ町にすみし吉野と申遊女〔中略〕茶はしほらしくたてなし、花を生替^{いけかえ}土圭^{とけい}を仕懸なをし、娘子達の髪をなで付²⁹

[21] 狂歌：半井ト養『ト養狂歌集』。貞享元年（1684）以降刊

一、ある人のもとへ夜はなしに人々ともなひて行けるに、夜もふけさるに八つの^{とけい}時計をうたせければ、ぬしはらを立て、とけい坊主をいましめんといふ。しばらく待給へ、一首よみ侍らん。そのゝちは主のはらの居るほどはなし侍らんといへば、皆々尤と云ければよめる。

またよひの更行かねのこゑするは にくひやつめのとけい坊主よ³⁰

²⁷ 日本俳書大系刊行会編『談林俳諧集』（日本俳書大系 7）日本俳書大系刊行会、1926 年、209 頁。

²⁸ 鈴木淳、小高道子校注・訳『近世随想集』（新編日本古典文学全集 82）小学館、2000 年、235-236 頁。

²⁹ 麻生磯次、板坂元、堤精二校注『西鶴集 上』（日本古典文学大系 47）岩波書店、1957 年、131 頁。同校注本の頭注に「当時昼夜の時間の長短があつたので毎日分銅を調節する必要があつた。この前後上流社会の夫人の素養を吉野が十二分に發揮する描写」と付す。

³⁰ 北海道大学附属図書館所蔵本（半紙本。二巻一冊。刊記「うろこがたや 新板」。請求記

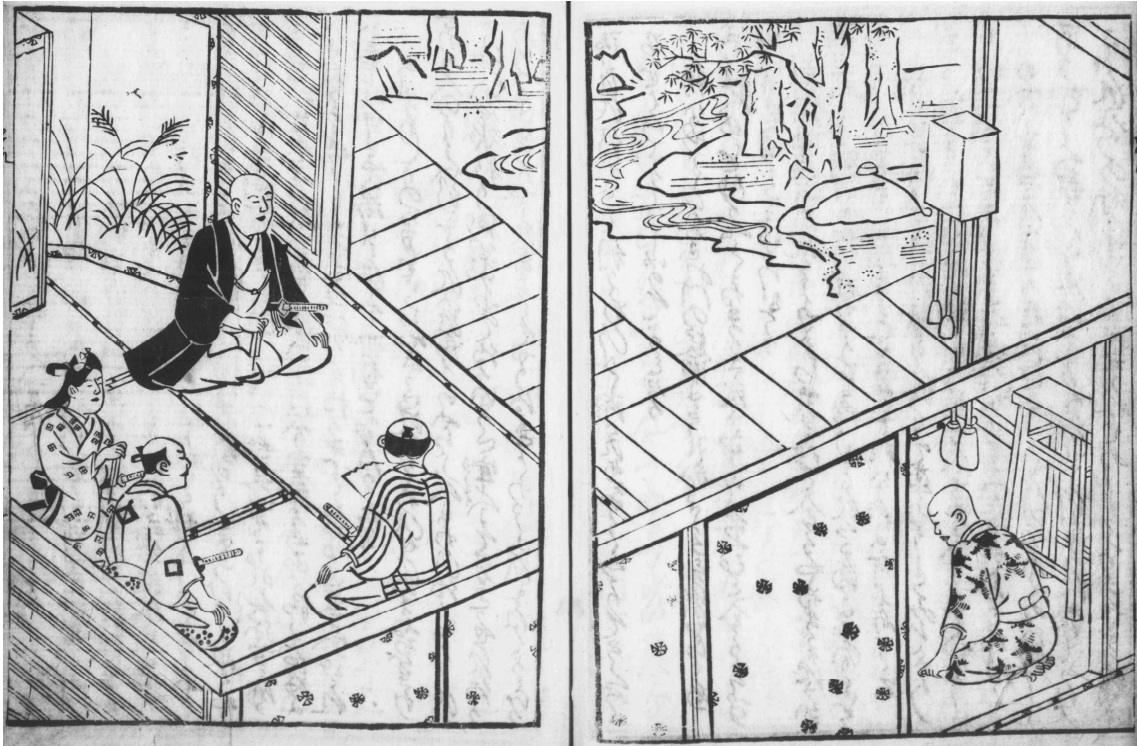


図2：夜話会の時計坊主（『卜養狂歌集』）³¹

[2 2] 地誌：黒川道祐『雍州府志』巻六、金玉部。貞享3年（1686）刊

土圭

自鳴鐘。倭俗謂土圭。元自阿蘭陀国来。今 本朝人倣彼所製而処々造之。其内御幸町二条北所造為冝。又砂土圭漏刻亦今造之³²。

[2 3] 浮世草子：井原西鶴『男色大鑑』巻三・第四。貞享4年（1687）

何となく時斗（トケイ）の間に出しに³³

号：L-1 89-BO。DOI：10.20730/100000009）、18 丁表～19 丁裏。本刊本は、以下の研究における「版本（へ）：うろこがたや版（半紙本）」にあたるため、刊行年を貞享元年（1684）以降と推定した。近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 狂歌編 6 卜養狂歌集他』勉誠社、1978 年、349-372 頁所収の解題、とくに 359 頁。

³¹ 前掲北海道大学附属図書館蔵本、18 丁裏～19 丁表。

³² 立命館大学図書館西園寺文庫蔵本（請求番号：SB291.62/Ku-74）、巻 6、37 丁裏。

³³ 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（請求記号：913/WI/6。DOI：10.20730/100029310）、巻 3、15 丁表。

[24] 浮世草子：井原西鶴『日本永代蔵』巻五・第一「廻り遠きは時斗細工」。貞享5年（1688）刊

唐土人は心静にして、世の^{かせぎ}□もいそがず、琴碁詩酒に暮らして[中略]中々和朝にて、此まねする人愚なり。年中工夫にかゝり、昼夜の枕にひゞく^{とけい}時計の細工仕掛置しに、其子大かたに仕継、其跡孫の手にわたりて、やう／＼三代目に成就して、今世界の重宝とはなれり。去ながら、口過にはあはぬ算用ぞかし³⁴。



図3：長崎来航の唐船と積荷の時計（『日本永代蔵』巻5）³⁵

³⁴ 国文学研究資料館高乗文庫蔵本（請求記号：89-323-1～6。DOI：10.20730/200015843）巻5、2丁表。活字本は、野間光辰校注『西鶴集 下』（日本古典文学大系48）、岩波書店、1960年、141頁。

³⁵ 前掲国文研高乗文庫本、巻5、3丁裏～4丁表。

[25] 雑俳：不角編『へらず口』上巻。元禄7年（1694）

溜息に錆^{サビ}よ揚屋の釣時斗（東口）³⁶

備考：「釣時斗」は、重錘式の歯車時計のこと。史料30『和漢三才図会』の記述参照。

[26] 歌舞伎：中村明石清三郎、市川団十郎『兵根元曾我』第三。元禄10年（1697）刊

はてうごきますはづさ、ぜんまいとけいでございます。絲のあやつりをもつてうごきました。たゞいまはたらかせてみせませうとて、此いとを引にしたがい、この人形がはゝ様のまへへ参まして、もろあしをおつてなげきますとて絲を引ければ、いひしとおり也。またもとの所へ行、又顔をしかめますといへば顔をしかめる。はゝみな\ /よくつくりたる物也とて、みなみなおくへ入にけり³⁷。

[27] 浮世草子：江島其磧『傾城色三味線』大坂之巻・第六。元禄15年（1702）

斗鶏仕掛の人形の歩くやうに、鍊りだし給ふを³⁸

[28] 浮世草子：江島其磧『風流曲三味線』巻六・第四。宝永3年（1706）

是は大坂の竹田が細工時計、ぜんまいを以て此人形に只今盃のしたみをのませまする³⁹。

[29] 雑俳：来山ほか点『誹諧三国志』。宝永6年（1709）か

じいわじわ時斗人形にあをがれて（京 如泉点）⁴⁰

[30] 類書：寺島良安『和漢三才図会』卷十五。正徳2年（1712）序

自鳴鐘 とけい 俗に時計と云う

五雑組に云う、西僧利瑪竇、自鳴鐘を有す。中に機関^{カラクリ}を設く。一時に遇ふ毎に輒ち鳴る。是の如くにして歳を経て頃刻^{タガイ}の差訛無きや、亦た神なり⁴¹。[中略]

³⁶ 鈴木勝忠編『未刊雑俳資料』第27期4、鈴木勝忠、1964年、へ2丁表。

³⁷ 国書刊行会編『脚本』上巻（徳川文芸類聚6）国書刊行会、1915年、27頁。

³⁸ 藤村作校訂『珍本全集』前篇（帝国文庫1）博文館、1928年、244頁。

³⁹ 水谷不倒校訂『其磧自笑傑作集』（帝国文庫8）博文館、1929年、149頁。

⁴⁰ 京都大学大学院文学研究科・文学部図書室蔵本（請求記号：国文Jg85）、28丁表。

⁴¹ 明・謝肇淛『五雑組』（和刻本。国立国会図書館蔵。寛文元年〔1661〕刊。請求記号：822-15）巻一、天部二、40丁表。

△按るに、土圭〈一に圭尺と名づく〉は八尺の板を以て表とし、之を豎てて以て晷を測り、時刻を知り、夏至冬至の差を定む。曆家者流必要の重器也。

漏刻は水を桶に盛り、漏る所の水を量り、時刻を知る。其の巧甚だ精し。天智帝、十年にして始めて漏刻を作り、時辰の鐘を撞く。然るに近頃自鳴鐘有りて以来、之に如く者無し。而して俗に時計と名づく。楼時計有り〈台有て形鐘楼の如し。上に自鳴鐘を安（お）き、機自ら旋じて鳴る〉。懷中時計有り〈形甚だ小にして懷中に入るべし。阿蘭陀人始めて将来す〉。釣時計有り〈家の柱に掛く。二の鍾有り。自旋するに随て、一の鍾は垂れ、一の鍾は自昇す〉。皆中機車輪の如くなる者に刻齒多く相接り、機転運旋す。鉄を用いて之を作る。世牟末伊と名づく。是乃ち旋機の根なり（原漢文）⁴²。

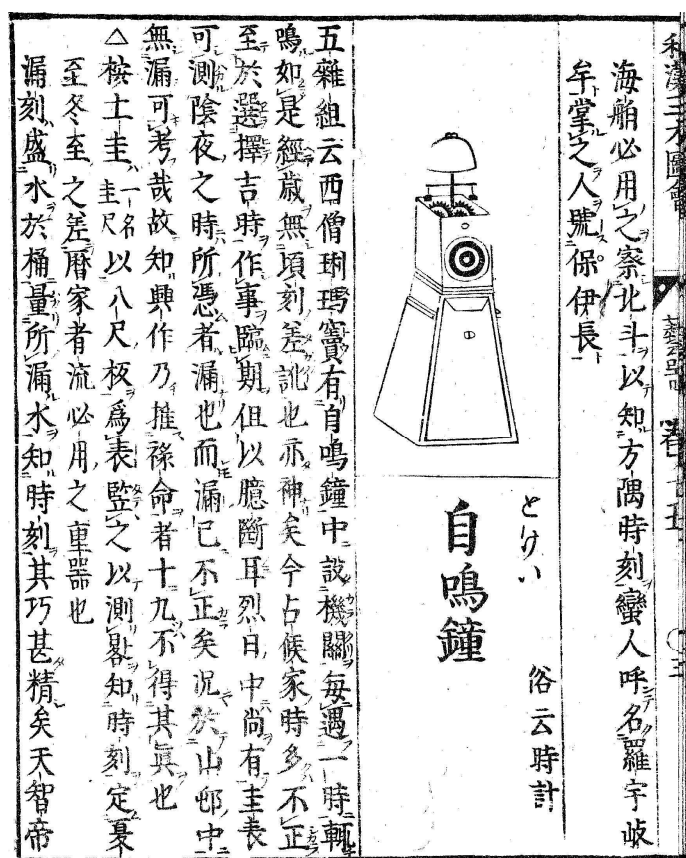


図4：自鳴鐘（『和漢三才図会』巻15）⁴³

[3 1] 西川如見『兩儀集説』。正徳4年（1714）

近世南蛮製造ノ自鳴鐘、日本ニ入リテヨリ本朝ノ工人是ニ倣ヒ製スル者今遍ク世ニ用

⁴² 国文学研究資料館蔵本（請求記号：マ3-1-1～79。DOI：10.20730/200002914）、巻15、3丁表～裏。

⁴³ 同上、3丁表。

ヒテ土圭ト号ス。土圭ハ本ト周公ノ時ノ景表ノ名ナリ。今ノ人以テ蛮器ニ名ツク。元ト南蛮製ノ土圭ニハ昼夜ノ長短ナシ。昼夜永短ハ各国ノ南北ニ従ツテ其国ニ応シテ附製スルモ可也。此故ニ今日本ノ土圭ノ上ノ游桁〔フリカネ〕櫛ノ齒ノ如キ者アルハ蛮製ナル者ニハ無之、長崎名工ノ附製ニシテ昼夜永短ヲ知ル加減ノ為メニ設ケタル也。九八七六五四ノ時数モ南蛮紅毛等ノ時数ニハ非ス、日本ニ用フル数也⁴⁴。

〔了〕

⁴⁴ 西川如見著、西川忠亮編輯『両儀集説』巻3（西川如見遺書16）西川忠亮、1907年、8丁表～裏。